



「ひらほく新聞」で検索!
★おかげさまで感謝の105号★
<http://www.hirahoku.com/>
☆ぜひ、バックナンバーをどうぞ!

発行所 読売センター平塚北部(ひらほく) 山本 直 〒254-0013 神奈川県平塚市田村9-4-32 電話 0463-54-2807

新しい日本へ贈る



幻冬舎 1100円+税

戦後七十四年、阪神淡路大震災から二十四年、そして、東日本大震災から八年目を迎えます。日々、事件・事故等によって多くさんの尊い命が失われていきます。決して風化させてはいけない大切なこと、新たな元号の時代へテレビ界最後の職人・鈴木健二さんからの全身全霊のメッセージです。

桜からのメッセージ

(中略) 戦争が終わって七十年もたつと、桜の花になぞらえて、散華と呼ばれた死に方が、当たり前であった時代を知っている日本人は皆無に近くなつたのではないのでしょうか。それどころか、かつての敵国人が観光客として満開の桜の見物に日本へ来る時代が訪れようとは。

そんな桜並木の中に、切り株にされてしまった桜があったのをご存じでしょうか。

敗戦の翌年、軍国主義に加担したとして無残にも切断された桜なのです。桜こそ迷惑な話です。桜はただ春が来たから自然の摂理に従って咲き、散つていただけなのに。

私には切り株となつた桜から託されたものがあります。それは戦後生まれの方々に、我々の体験談を語ることに。そしてもう二度と、桜の木を切るような痛ましい戦争をしないうと約束してもらつたことです。

戦争を風化

させないために

私は自分が死ぬ前にどうしても書き残しておこうと決心していることがあります。それは、あの東京大空襲のことです。

敗戦後七十年以上もたつと、戦争を知らない世代の人々が増加し、その反面、日本中にあつた無差別爆撃、広島長崎の原子爆弾投下、沖縄の凄惨な戦い、シベリア抑留の悲惨な死、核廃絶運動、超飢餓状況、大陸からの苦難の引揚げ……こうしたことが、歳月が流れるうちに少しずつ日本人の記憶から削り取られ、風化している名のもとで消えようとしています。

いま国会で行われている、憲法改正論議や自衛隊の派遣問題などの不毛な話し合いを見ていると、戦争を直接体験した穴呂愚人(アナログジン)達は、国会に出かけて行って、

戦争の恐ろしさを全議員に聞かせてやりたい衝動にきつとかられていることでしょうか。

一言目には、「国民の幸福と安全を守るために」と言っていますが、大東亜戦争でも、世界史の中に書かれていけるいかなる戦争も、軍隊が国民の安全や幸福な生活を守つた例は全くと言ってよいほどないのです。

むしろ国民の安全と幸福を無視し、押し潰してしまつたことの方が大部分なのです。西欧には「軍隊とは殺人集団である」という定義があるとも聞いています。

戦争とは誰が助かつて、誰が誰を助けたかなどは全くなく、不幸を招き、あらゆるマイナスが集結する以外の何ものでもないのです。

戦争に関する事柄だけではなく、平成になつて起こつた阪神淡路大震災や東日本大震災も、早くも風化の音が高くなってきています。人間にとつて悲しいのは、記憶するよりも、忘れることのほうが遥かに早い習性です。

なぜ風化現象は起こるのでしょうか。その第一の原因は、地震や津浪、戦場の銃撃戦などを考えると、人間が心理的に最も陥りたくない「恐怖」が襲つて来るからです。

喜怒哀楽は言葉や文章で表現できますが、恐怖は人に伝えることが不可能に近い心理状態なのです。NHKは東日本での地震や津浪の体験者に、あの時どうしたと語つてもらつた番組を頻りに放送して、後々の世代の人達に東日本大震災を伝えようと努力をしていますが、今後も続けるべきです。もちろん民放さんも新聞もです。

ところが、津浪が来たので、どこをどう逃げたという話はどなたもなさるので、逃げながら全身で感じていたはずの「恐怖」は誰も語らないというより、語る言葉が見つからないようです。現象だけを話さざるを得ないので、どなたの話もだんだん似てきて、迫力や説得力が欠けてきてしまつたのです。

同じことが、空襲にも原爆にも自然災害と共通して起こります。聞いている人は、また同じような話かと、話の先がわかつてしまつたのです。つまり、風化は社会の歴史的現象になる以前に、個人という当事者の心の中から始まつてしまつたのです。

もちろん、これから体験者として私が書く昭和二十三年三月十日夜、わずか三時間の中に、十万人が焼死体となつた東京大空襲の話も、どこまで伝わるかわかりません。これは世界の戦争史上でも特筆されるべき、アメリカのB29爆撃機の大編隊による無差別爆撃で、私が猛火烈風の中で、「死」と隣り合わせになりながらも奇跡的に生き延びた時の恐怖を、私があの時感じたのと同程度にお伝えするのは、文才の無さも手伝つて、とても不可能とは思いますが。

しかし、絶滅危惧種または消滅確定者として、一杯の能力をふり絞つて、書き連ねることによつて、戦争の風化を一秒でも先に延ばそうとたくらんでいきます。機会があれば、同じ言葉や何度でも繰り返して書いて伝えたいと決心しています。

これは体験談ではなく、皆さんへの遺言のつもりです。

同じことが、空襲にも原爆にも自然災害と共通して起こります。聞いている人は、また同じような話かと、話の先がわかつてしまつたのです。つまり、風化は社会の歴史的現象になる以前に、個人という当事者の心の中から始まつてしまつたのです。

き、アメリカのB29爆撃機の大編隊による無差別爆撃で、私が猛火烈風の中で、「死」と隣り合わせになりながらも奇跡的に生き延びた時の恐怖を、私があの時感じたのと同程度にお伝えするのは、文才の無さも手伝つて、とても不可能とは思いますが。

しかし、絶滅危惧種または消滅確定者として、一杯の能力をふり絞つて、書き連ねることによつて、戦争の風化を一秒でも先に延ばそうとたくらんでいきます。機会があれば、同じ言葉や何度でも繰り返して書いて伝えたいと決心しています。

これは体験談ではなく、皆さんへの遺言のつもりです。

お願いしたい 二つのこと

(中略) 私達穴呂愚人がお願いしたいのは、「戦争はするな」という言葉を絶対に守り抜いて戴きたいことが第一。第二は戦場で敵弾に身体を引き裂かれた人や、シベリアで寒さに凍えながらいつ終わるともわからない不安の中で死んでいった人、焼死、自決した人達。沖縄の人々の苦しみをはじめ、乗つていた軍艦もろとも爆破されて海底深く沈んだり、あるいは海上を

何時間も何日も漂流したりした後に、力尽きて遙かな故郷やお母さんの面影を懐に描きながら息絶えて、もしかしたら魚の餌食になつて、骨だけが海底に沈んだかもしれない私と同世代の人の痛ましい死。

これらの戦争で亡くなつた方達の死をリアルに想像してください。そして追悼し続けてくださることをお願いしたいのです。これは、あの切り倒された桜からのメッセージでもあります。

「戦争で亡くなられた皆様のお蔭で、今日の私達の平和があります」などと美化した言葉が、戦没者慰霊式典などでよく聞かれますが、私に言わせると、あれは違います。戦死された方は、空襲や原爆で亡くなられた方も含めて、すべて戦争による不幸な犠牲者です。

「平和」と「死」をつなげてはいけません。平和と死はつながるのには常に「幸福と愛と生きる」ことです。

あまりにも恐ろしく、この世で到底人が見る光景ではないという灼熱地獄の東京大空襲。その実体験が赤裸々に綴られています。

そして後半では、生きていくからこそその感動溢れる人生の良き思い出を語ってくれています。

生きていくからこそその感動溢れる人生の良き思い出を語ってくれています。

抜萃のつづり

珠玉のエッセイ、コラムを抜萃、小冊子にまとめ、全国の希望の団体・個人へ無料寄贈四十五万部。毎年一月末発行で、今年で何と七十八号。社会への感謝と報恩の思いから発行を続けてきた(株)熊平製作所の『抜萃のつづり』が今年も有難く届きました。

今回は、愛読紙『みやざき中央新聞』から山本孝弘さんのコラムを取り上げられていました。山本さんと昨秋、愛知県豊橋市の地元まで伺いする機会があり、SNS繋がりとはいえ、お仲間の方を交え初対面とは思えないようなとても有意義な熱い時間を共有させていただきました。以下、感動溢れるコラム(みやざき中央新聞30年4月9日号/取材ノート)をご紹介します。

叶わなかった 高校進学

肉体は単なる乗り物であって、本来の自分は魂である。子どもの頃から私はそう感じていました。

先日、5年前のみやちゅうを読み返していると、スプリチュアル・カウンセラーである神光幸子さんの記事を見つけました。記事を読みながらあらためて「魂

という真理が心に落ちました。

7年前に肉体を離れた父の魂は、今どこにあるのか。生き方が下手で、反面教師を絵に描いたような父でした。母に迷惑を掛け続け、それでも父なりに生き抜いた73年間は、彼にしかわからない思いの中で日々苦しくもがいていたこともあったのではないかと思えます。

戦後の貧しい時代、5人兄弟の次男として生まれた父は小学生の時に父親を亡くしました。一つ違いの長男と二人、家計を助けるために中学を出てすぐ工場で働きました。父のお通夜の時、末っ子の叔母が涙を流しながら言っていたことを、私は一生忘れないと思えます。

「兄ちゃん、頭がよかった。中学3年の時、先生が家に何度も来て『なんとか高校に通わせてやってほしい』と母ちゃんを説得してた。でもその度に兄ちゃんも『幼い弟や妹のために僕は働きます。高校に興味はありません』って言ったんですよ。兄ちゃん、ありがとう。……」

私の兄が高校受験をした日は、家族の中で父だけがそわそわしていました。そして合格したと分かった

時、父はとても興奮し、「握手しよう」と兄に手を差し出しました。でも思春期の息子というものは素直ではありません。

「あんな高校、名前を書けば誰だっけ入れるんだ！」そう言い放った兄に父は怒るでもなく、「そんなこと言うな」と、ただ悲しそうに呟きました。

そのことを兄が覚えているとは思っていませんでした。ですが父が亡くなった日の晩、兄は私に言いました。「あの人のとって高校進学っていうのは夢だったんだよな。あんなこと言わなきゃよかった。握手すればよかった……」

私が結婚する前、妻の実家に両親を連れてあいさつに行った時はとても不安でした。父が何がしかの失態を演じるのではないかと心配したのです。しかし、父は普段とは全く違っていました。その時の父の話は本当に面白く、私を含めみんな大笑いしました。そんな父は見たことがなく、私は驚きました。

「自分はこの人のことを何も知らないんだな」と思いました。結局、父とお酒を飲むことはありませんでした。今

いきなり目の前に父が現れても全く驚かないので、一緒に飲んでみたい気もします。もうすぐ7回目の命日がやってきます。

(中部特派員/山本孝弘)

感謝と恩送り

亡き私の父は、3兄弟の長男で自身が10歳の時に父親が戦死、厳しい祖父に育てられたと聞きました。兼業農家の後継ぎとして上の学校には行かせてもらえなかった自身のことがあり、自分たち兄弟には進学・就職、それぞれ皆思い通りにさせてくれました。

そして自分はそんな恩を返すことに……。以来、出会う若者たちには、学校生活や将来に向けて、『何のために』という大切なキーワードを伝えてきました。あ、あの勝手に中退してしまったことを知ったときの両親の思いはいかばかりだったか……。他にもいろいろな迷惑をかけたこと、あらためて、ただ申し訳なく思ひ出しました。

そんな父も、孫の顔を見せに帰省した折、身体を壊して以前のように大酒は飲めなくても、煮物など懐かしい「おふくろの味」を囲み、嬉しそうにビールを酌み交わしてくれました。

孫たちに写真や書類を見せながら、終戦間際の貴重な体験を語ってくれたこと。今では本当に有難い思い出です。

現在の自分はいえ、同じように人の親という立場になり、有難いことに、成人した息子と楽しく飲む機会もいただいています。亡くなった父へ恩返しができないいま、生意気なようですが我が子のみならず、日本の未来を担う若者、子どもたちに、自分にできることで何かしらを伝えていきたい。

新たな元号へと進む大きな節目にあたり、戦争体験者と関わり、昭和・平成と生きてきた私たちの年代こそが、「恩送り」として、しっかりと次世代へとバトンをつないでいかなければと思います。当「ひらほく新聞」からの発信もそんな一助を担えれば幸いです。

まぶく

NHK連続テレビ小説の『まんぷく』もいよいよ終盤。モデルとなった日清食品創業者の安藤百福さんは、とにかく絶対にあきらめなかった。

成功と失敗をくりかえし、無一文になっても、「失ったのは財産だけではないか。その分だけ経験が血や肉となって身についた」と再起をかけて立ち上がった。

「人生に遅すぎるということはない。六〇歳、七〇歳からでも新たな挑戦はある」

百福の残したこの言葉は、先の見えない世の中と人生に不安を抱える多くの人々へ向けた渾身のメッセージである。(書籍「転んでまただては起きるな」より)

以下、関連して愛読紙『みやざき中央新聞』2019年2月18日号の社説より
あのラーメンは消費者のニーズがあつたから生まれたのではなく、誰も欲していないものを生み出して新たな価値を創造したものだ。そして、これからの時代の価値創造において、最も注目すべきは「あなた」自身だ。世の中が求めているわけではないが、価値を創造することで、「あなた」は今以上に世の中の役に立つ存在になる。

自分の価値創造は人生の目標そのものだ。「ものづくり」だけに熱狂するのではなく、自分自身にも熱狂し、その価値を高めるのだ。時代は遂にここまで来た。

編集後記

2月中旬、ネット配信で3年程前に放映された連続ドラマ山崎豊子作の最高傑作『沈まぬ太陽』を鑑賞。いかにも昭和的な部分は複雑な印象も受けたが、とにかく感動しきり、20話を一週間ほどで一気に観た。

あの忌まわしい墜落事故。以前ご紹介したディズニー博士・加賀屋克美さんの悲話が思い起こされた。ディズニーに就職、働き始めてジャングルクルーズの船長をしていた頃の8月12日、休憩室に日航機事故の写真と花束があり、その写真にはたたくさんのランドのお土産やぬいぐるみが。目を覆いたくなるような

写真を見ながら、先輩からの渾身のメッセージ……。「お盆の繁忙時期で、二回しか乗れなくても喜んで帰った人たち……。ランドには、全国から事情が違ってくる方々が来る。お前は何十回も乗るかもしれないが、その中に今日が最後という人がいるかも知れない。どんな思いで来ているか。どの一回も大事な一回。どの一回だって絶対に手を抜けない。すべて全力投球で行け！」加賀屋さんに「何のために」の熱いスイッチが入ったという。

御巣鷹山へ、謹んでご冥福をお祈りいたします。